

# 博士学位論文審査要旨

2007年6月4日

論文題目： 反近代から「普遍」としてのヴィジョンへ  
—ウィリアム・モリスの思想展開—

学位申請者： 木村 竜太

審査委員：

主査：	文学研究科 教授	今関 恒夫
副査：	文学研究科 教授	石坂 尚武
副査：	言語文化教育研究センター 教授	山田 眞實

要 旨：

本論文は、ウィリアム・モリス（1834-1896）が、ヴィクトリア朝期における二つの思想潮流、「中世主義」と「社会主義」を継承し、変容・内在化させ（「領有」）つつ、独創的な思想展開をなしとげていった経過を、歴史的論理的に究明することを目的とする。換言すれば、思想とは所与の概念、行動、思想を自らに見合うものへと転換し、独自の思想を形成していく作業の積み重ねに他ならないという論者の思想観、方法的立場から、「中世主義」、「社会主義」が、モリスにおいてどのように領有され、固有の思想を結実させるにいたったのかを、同時代の社会状況・思想潮流のなかで検討し、従来の理解とは異なったモリスの思想展開を探ろうとしている。

論者はまず、内外のモリス研究の歴史をたどり、従来、モリスを「中世主義」者あるいは「マルクス主義」者と排他的に「名指し」たり、モリスの「社会主義」者としての思想形成が「中世主義」思想の放棄によってなしとげられたと論ずるのが一般的であったとする。それに対して論者は、既成の「中世主義」や「社会主義」のたんなる受容や克服ではなく、19世紀社会を支配する「近代」を批判し、それを克服した未来に希望を託す詩人・工芸家・社会改良家モリスによる、それらの領有に目をとめるべきだとする。それはまた、同時代のトマス・カーライルやジョン・ラスキン等の保守的「中世主義」、マルクス等の分析的科学的「社会主義」を継承・転換することでもあったという。

このように、モリス思想を構成するのは、「中世主義」から領有し、未来を豊かなものとする「オルタナティヴなヴィジョン」と、それを社会的に実現する手段としての「社会主義」である。それらを独自に領有しえたからこそ、モリス自身のヴィジョンである『ユートピアだより』を生み出すことができた。それは「中世主義」に発するとはいえ、決してモリスの個人的な「趣味」の世界で終わってはいない。モリスは「中世主義」から得た「オルタナティヴなヴィジョン」を、「二段階社会主義論」によって、より高次の段階へと押し上げ、来るべき世界のヴィジョンとして描きだした。「中世主義」の領有から得た「個的」なヴィジョンは、「科学的社会主義」においては「空想」として放逐されたが、モリスはそれを社会主義の「科学」と結びつけることによって、「普遍化」されたヴィジョンへと転換した。そこにモリス思想の独自性と現代性がある、と論者は結論づける。

多様な顔をもつ思想家モリスの研究としては、本論文の論旨との関連に限定しても、工芸家モリスとの関係、無政府主義的とされる場合もあるモリスの思想傾向との関係等、さらに深化すべき部分はある。しかし、モリス研究がかならずしも盛んとはいえない日本の思想史学界において、内外のモリス研究を広く渉猟し、モリスの著書と数多くの講演等を解読し、「中世主義」、「社会

主義」の領有という独自の観点から、モリスを 19 世紀思想史に位置づけ、その思想に現代的意義を見いだそうとする本論文は、日本におけるモリス研究、さらには近代イギリス思想史研究に大きく寄与するものと考ええる。

したがって、本論文は、博士（文化史学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2007年6月4日

論文題目： 反近代から「普遍」としてのヴィジョンへ  
—ウィリアム・モリスの思想展開—

学位申請者： 木村 竜太

審査委員：

主査：	文学研究科 教授	今関 恒夫
副査：	文学研究科 教授	石坂 尚武
副査：	言語文化教育研究センター 教授	山田 眞實

要 旨：

申請者は、2007年5月19日（土）13時30分から2時間にわたり、明德館において、申請論文に関する公開講演を行い、参加者からの質問に適切な応答を行った。その後、上記審査委員3名による、約3時間の口述試問をおこなった。本論文の作成意図、内容、その他関連事項についての質疑に、申請者は終始的確に対応し、専門分野、関連領域に関する広い知識を有するとともに、高度な学術的考察力を備えていることを示した。さらに、この分野で必要とされる外国語（英語・ドイツ語）の十分な学力をもつことも判明した。

したがって、審査委員は、申請者が博士（文化史学）（同志社大学）の学位取得に十分な専門分野、語学に関する能力と学力を備えているものと判断し、総合試験の結果は合格と認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 反近代から「普遍」としてのヴィジョンへ — ウィリアム・モリスの思想展開 —

氏名： 木村 竜太

要旨：

1 本論文の目的と構成

1-1 本論文の目的

本論文の目的は、ヴィクトリア朝イングランドにおいて、詩人、工芸家から社会改良家、社会主義者にいたるまでの幅広い活動を行ったウィリアム・モリス（1834. 3. 14-96. 10. 3）の思想展開を考察することにある。その際、中世主義と社会主義という二つの重要な思想潮流のモリスによる「領有」（appropriate）という視点が導入される。あえてその用語を用いるのは、第一に思想史を単なる影響史として読み解くのではなく、「思想」とは、他者の概念、行動、思想を自分に見合うものへと変えて用いることによって、自らの思想を形成していく作業とその積み重ねに他ならないという思想観を前提として、思想史を構築するためである。

この概念を用いつつモリスの思想展開を語ることの必然性は、第二に、単なる中世主義者と呼ぶにせよ、ロマンティックな革命家、あるいはマルクス主義者と呼ぶにせよ、それと名指すことは排他性を伴う行為であり、「神話」形成的な行為であるとの認識から、またモリスはそれぞれの思想潮流の自己内化（領有）を「排他的」な行為として行ったのではないとの認識から生まれる。

「領有」という概念を使うことで、モリスを、それと名指すことではなく、モリスによる同時代の思想の「創造的」な継承や変容の重要性を訴えることが可能となるからである。これにより、一見「中世」風にも見える世界観を持つ、来るべき社会のヴィジョンとしての『ユートピアだより』を語ったモリスの思想展開の十九世紀性と、それと同時に、現代から未来にまでつながる「普遍性」をも明らかにできると考える。

1-2 構成

本論文は全五章より成り立っている。第一章においては、先行研究に触れつつ、問題の所在を明らかにする。第二章、第三章では、本研究がモリス思想のひとつの核と見なすヴィクトリア朝期における中世を理想と見る態度（中世主義思想）の展開を論じつつ、モリスがその中世主義から如何に彼の同時代に対するオルタナティブなヴィジョン、来るべき未来社会のヴィジョンを構成し得る要素を領有したのかについて論じる。それは、工芸家としての活動とそれに関する考察の結果、モリスが独自に行き着いた歴史の螺旋的発展という認識の結果である。

第四章では、モリス思想のもうひとつの核である社会主義思想を扱う。ここでは、モリスが中世主義の領有から得たオルタナティブなヴィジョンを達成するための手段として見いだした社会主義の方法論について焦点をあてている。ヴィジョンを本質的なものとして追い求める方法論と社会主義のシステム的な基礎を構築する運動との間に生じる齟齬を、モリスが如何に乗り越えたのかがここでは問題となる。モリスは、その齟齬を、手段としての社会主義を領有することで、システムの構築への手段と本質的な世界への到達とを止揚する二段階社会主義論によって乗り越え、自らの思想をも単なる個人的なヴィジョンを越える「普遍的」な訴えかけを持つもの、そのヴィジョンの実現の希望を託せる実践的な思想へと再構成していくのである。

第五章では、『ジョン・ボールの夢』と『ユートピアだより』というモリスの社会主義時代の主要な著作を論じることで、中世主義的「中世」の領有により到達した歴史観及びオルタナティ

ヴナヴィジョンと、そのヴィジョンの実現に希望を与える理論による補完をなした社会主義の領有が如何にモリス思想の独自性をつくりあげたのかを論じる。社会主義者としてのモリスが未来社会の構想を「中世」的な色合いを持たせつつ描いた『ユートピアだより』の考察の部分は、モリスの思想展開における中世主義と社会主義の有機的な連関、その内容の豊かさを示すものとして特に重要な役割を担っている。最後に、結語において、本論文を振り返りながら総括し、改めてモリスの思想展開における中世主義と社会主義が占める位置のそれぞれの重要性を明らかにした。さらにモリス思想の現代性にまで踏み込みつつ、論を閉じる。

## 2 本論文の内容

本論文における主要な論点は、モリス思想における中世主義と社会主義の領有と、それによるモリスの思想展開を明らかにすることである。それは、自らの理想の実現に必要な理論を補完するものとして社会主義を「発見」したモリスの思想展開における中世主義と社会主義の位相を明らかにすること、その「過去」への視座と「未来」を志向する視座という二つの相反する方向性を持つ思想潮流のモリス思想における場を明らかにすることでもある。モリスの過去＝中世への志向は、単純に乗り越えられたものとして、乗り越えられて後には副次的なものとして扱えば良い問題なのかどうか、もしそうでないとするれば、その二つの方向性に如何に整合性をつけることが可能なのか。

この問題を考察するにあたって、まず中世主義という思想潮流を取り上げる。従来中世主義は単なる保守的なものとして考察されてきた。そうであればこそ、モリスのヴィジョンとしての語り、『ユートピアだより』における「中世」風の色彩は、彼の社会主義が未来へ向けた現状変革への真摯なコミットであるとされる限り、副次的なもの、あるいは残滓の域を出ないとされたきたのである。しかし、近年の中世主義研究が明らかにしてきたように、中世主義は単なる保守的なものではない。それによるなら、ヴィクトリア朝における中世主義的な「中世」の利用は、進歩主義的な人達によってもなされている。それどころか、マルクスを含めた社会主義者の間でさえ、中世主義的な思考方法は容易に見いだせるのである。つまり、それはヴィクトリア朝期イングランドにおける社会的な言語として、あらゆる意味を包摂するものとして通有していたのであり、恣意的な利用が可能なツールであった。

モリスは、この伝統の中で自らの思想の基礎と、それだけでなく、十九世紀に取って代わるべき世界観＝ヴィジョンを構成する要素を獲得する。その要素には、確かにトマス・カーライルやジョン・ラスキンといった保守的な中世主義者の思想の十九世紀批判を受け継ぐもの、中世には豊かに存在したとされる芸術とそれを育み、慈しむ民衆、仕事と社会の質の高さという概念が見いだせるであろう。しかし、モリスは単なる保守的思想の追随者でもないし、中世主義もそのような一面的なものではない。モリスは、自らの工芸家としての実践、考察によって、過去への学びは現代に生きる人間にとって非常に重要だが、しかし、過去のを単純に蘇らせることが現代を豊かにすることにはならないと看破していた。彼は、芸術の歴史の考察から、過去の事物の研究は、現代を、そして未来をより豊かにするためにこそなされるべきであり、過去のある要素の復活には、その単純な再生ではなく、未来を豊かにするためにより高次の段階への再生こそが不可欠なのだと結論する。未来を豊かにするためにこそ過去から学ぶ。過去の中に見いだせるオルタナティブなヴィジョンを構成し得る要素。それが、モリスが中世主義から領有し得た意味である。

モリスは、このオルタナティブなヴィジョンの達成を、社会全体を変革することによって、未来に、より高次の世界を構成するであろう社会主義という手段に見いだした。彼にとっては、社会主義は手段であり、決して目的ではない。モリスは過去から学んだオルタナティブなヴィジョンを達成すべき「本質」＝目的としたのであったが、しかし、それをのみ追うことは、個人的な趣味の世界への耽溺に他ならない。しかし、他方で現状変革の手段であるべき社会主義を目的化

し、システムの変更にのみそれを限定する経済還元論（システム還元論）にしてしまうことは「本質」的なことを見失う危険性や社会主義という手段の無力化にもつながりかねない。個人的な趣味の世界を「普遍」的なものとして開くことと社会主義のシステムの構築、この二つを横断する思想あるいはヴィジョンを構築する必要がある。過去から学んだオルタナティブなヴィジョンを「普遍」へと開かれたものにする、それがモリスが社会主義から領有し得た意味であると言える。

モリスは、その横断を二段階社会主義論へと構築する。その上で、「中世」風の色彩を持つ『ユートピアだより』を描くに至る。『ユートピアだより』は、彼の描写においては、システムを構築する「国家社会主義」の段階を経た上で形成される社会であり、彼が過去から学んだ「本質」的なものがより高次なものとして再生した世界である。モリスが、このシステムの構築の後に形成されたヴィジョンを描いた意味は、自らが領有し得た「本質」を「普遍」への意思によりヴィジョンとして世に問うこと、そして科学的な社会主義にあっては空想として切り捨てられるヴィジョンと、システム構築のための「科学」との間を横断する思想をつくりあげることにあった。モリスの思想は、この点で、ヴィジョンを「空想」へと放逐してしまう現代の思想への、まさにオルタナティブなヴィジョンとなり得るのである。中世主義思想は、モリスのヴィジョンの「本質」たる世界観を築き、社会主義の科学はその理論的な補完をなした。この二つの思想は、モリスの内には何ら排他的なものではなく、その二つの領有があつてこそ、モリス思想は、現代においても大きな価値を持つ独自性あるものとして形成されたのである。